

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	紅葉會詠草 : 文苑
Author(s)	長川郎; 筑水; 俊左久; 竹坡; たちばな
Citation	龍南會雜誌, 96: 44-46
Issue date	1902-12-21
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5418
Right	

人は、わが心を離れて、わが心を見ないのである。

林中の黙想。黙想を破る可きものは、あたりには、一つもない。

晩秋の太陽も——かなしき音に吹く風も——淋しい、幽かなさくやぎも——（十二月十二日稿）

原稿締切後、止を得ず筆をさらねばならぬことゝなつて、覺束なくも、かゝるものゝためである。一夜づくりで、推敲する隙もなく、あたゝ原作を汚した罪は、幾重にも謝するところである。

紅葉會詠草

長川郎

さよふけて誰にもゆるの情ぞや堤つたひに笛のきこゆる
祭はてゝ物うる媼かへりゆく杉のなみ木に秋の日くるゝ
夕ははは金峰の空に消ゆきて秋風さむし飽田野のはら

筑水

庵の戸に肩寒けなる若き尼のくるぞめぐるも秋の風ふく
鳥狩のかへさをつれにたくれけり檻紅葉ちるたるがれ堤
われもまたすぐせもつ身ぞゆく秋の夕をかたれ旅の新尼

俊佐久

いざ風よ櫻吹きまけ亡き母のみ墓抱きてわれうもれてん
鬼百合にやま蟻多きもりの堂呪ひのくぎの銀杏に錆びぬ

手を取りて二人紅蓮に立つと見て莖くづ折れぬ夏の夜の夢
 竹月夜あまりに人の戀しきに藪をあさりて笛をつくりぬ
 また逢はむさらばの聲の低かりし柴の戸今は水流れ行く
 かねの音の雨にきこゆる秋の夕大江の里のそよるに寒き
 月落ちて闇に廣ぐる梅が香に此身さながら浮くよと思ひし
 ゆくりなく人に逢ひにし夕よりせめてはたのむ此野となりぬ
 蘆枯れて雨にさびしき船路なりき友の柩を送り行くどて
 燃ゆる色は夕の空に仰き見よ君が送りし花よこど足らぬ

竹

坡

里川に尺八ぬらす虚無僧の小がさに白うあしのはなちる
 笛ふいて岬の堂へいらつたひまつかせ高う夕日うつする
 庭三坪こゝにも秋は訪ひぬらしさける紫苑に露れもげなる
 妹が生けたる床のをみなへし胡蝶とひくる秋の日ながや
 朝顔のつばみを取りて新尼が御堂のかべに書く文字や何
 赤き蟹の群れるて遊ぶいさゝ川汀ましろにはきの花ちる
 たゞりゆく川添みちの檻紅葉風にみたるゝ様のよるし
 月になびく出湯のけふりは白うあかつき寒し温泉の山
 霜ばしら足にくづるゝ岨道を氷をかみてのぼりゆるかな

(以上三首修學旅行中作)

四十六

三味線の昔かたりをみつ遠き隣のれうな今日も来てする
 大前にをくしき石の高麗獅子の面はげしくもうつあられかな
 補陀落のこゑもかなしき順禮の小さき管笠紅葉かつ散る
 小猫よふ少女の姿園に入りて菊の花壇にすゞの音のする
 紙燭して廊下を通ふ上謁のあしをとさびし秋の夜のあめ
 馬ひきて檜原を通ふ賤の男が歌なさけあるあきの夕ぐれ
 檣紅葉風にみだるゝ山ざとの家居まばらに梭の音のする
 島原はうるはしの濱浪きよく九十九の島に松れもしろき
 これやこれ汚なき花百舌が音の寒けき山に山茶花のさく
 旅籠屋の丸行燈の蔭にして今日の日記かく筆のはしちぬ

(以上四首修學旅行中作)

